

心朽窩新館へ戻る

鬼火へ

# アンソロジーの誘惑

## 奇形学の紋章 俳諧編



——アンソロジーとは偏愛といふ奇形学である。  
テラトロジー

藪野直史

# アンソロジーの誘惑／俳諧篇

飯尾宗祇

○ほどふれどかへらぬたびを思ひわび

はかなやなきもあることちする

○いかなる道ぞこひといふもの

いもせ山いればまよはぬ人もなし

○うき事もうれしきふしも夢なれや

あしのかれ葉のかりの世の中

○なみだすゝむる世とそなりぬる

せめて身に人のうれへをみずもがな

○門させりとやたちかへるらむ

やすらはばなほこそ浮世出でてみよ

○山の端にかすむや名残庭の雪

○あけば又いつかはこよひ穠の月

○世にふるもさらに時雨のやどりかな

○氷よりひくまゆならし瀧のいと

田捨女

雪の朝二の字二の字の下駄のあと

水鏡見てよまゆかく川柳

ぬれ色や雨のしたてる姫つゝじ

椎本才磨

笹折て白魚のたえだえ青し

猫の子に嗅がれてゐるや蝸牛

笹の葉に西日のめぐる時雨かな

里犬や枯野の跡を嗅ぎありき

松尾芭蕉

命なりわづかの傘の下涼み

あら何ともなやきのふは過てふくと汗

鹽にしてもいざ言傳てん都鳥

今朝の雪根深を菌の枝折哉

蛛何と音をねなにと鳴穠ねの風

よるべをいつ一葉に蟲の旅寢して

夜ル竊ひそかニ蟲は月下の栗を穿ツ

枯枝に鳥のとまりたるや穠ねの暮

櫓の聲波ヲ打つて腸氷ル夜や涙

雪の朝あした獨り干鮭を嚼得タリ

藻にすだく白魚とらば消えぬべき

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜哉  
のわき

氷苦く堰鼠が咽のをうるほせり

世にふるもさらに宗祇のやどり哉

くほのみ  
榭のや花なき蝶の世捨酒

霰聞くやこの身はもとの古柏

野ざらしを心に風のしむ身哉

猿を聞く人捨子に穠の風いかに

手にとらば消えん涙ぞ熱き穠の霜

死にもせぬ旅寝の果よ穠の暮

市人よこの笠賣らう雪の傘

海暮れて鴨の聲ほのかに白し

山路来て何やらゆかしすみれ草

古池や蛙飛びこむ水のおと

いなずまを手にとる闇の紙燭哉

名月や池をめぐりて夜もすがら

旅人と我名よばれん初しぐれ

冬の日や馬上に凍る影法師

いざさらば雪見にころぶ所まで



旧里や臍の緒に泣く年の暮

鐘消えて花の香は撞く夕哉

何事も招き果てたる薄哉

蛸壺やはかなき夢を夏の月

おもしろうてやがてかなしき鶺鴒舟哉

島々や千々に砕きて夏の海

這ひ出でよ蚕屋が下の墓の聲

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

雲の峰幾つ崩れて月の山

暑き日を海に入れたり最上川

象潟や雨に西施が合歡の花

一家に遊女も寝たり萩と月

わせの香や分入右は有磯海

塚も動け我泣聲は穠の風

あかあかと日は難面も穠の風

むざんやな甲の下のきりぎりす

石山の石より白し穠の風

今日よりは書付消さん笠の露

月いづく鐘は沈める海の底

浪の間や小貝にまじる萩の塵

憂きわれを寂しがらせよ籬の寺

籬の風伊勢の墓原なほ凄し

初しぐれ猿も小蓑をほしげなり

薦を着て誰人います花の春

蝶の羽のいくたび越ゆる塀の屋根

頓て死ぬけしきは見えぬ蝉の聲

病雁の夜寒に落て旅哉

海士の屋は小海老にまじるいとゞ哉

梅若菜丸子の宿のとり汁

憂き我をさびしがらせよ閑古鳥

牛部屋に蚊の聲暗き残暑哉

籾の色糠味噌壺もなかりけり

ねぶか  
葱白く洗あげたる寒さかな

人も見ぬ春や鏡の裏の梅

鹽鯛の齒ぐきも白し魚の店たな

なまぐさし小菜葱が上の鮓こなぎの腸はえ

生きながら一つに氷る海鼠哉

青柳の泥にしだるる潮干かな

稻妻や顔のところが薄の穂

むめがゝにのつと日の出る山路かな

數ならぬ身となおもひそ玉祭

稻妻や闇の方行くかた五位の聲

菊の香や奈良には古き佛達

この道や行く人なしに穠の暮

この穠は何で年寄る雲に鳥

穠深き隣は何をする人ぞ

物いへば唇寒し穠の風

旅に病んで夢は枯野をかけ巡る

榎本其角

鶯の身を逆にはつねかな

聲かれて猿の齒白し峰の月

餅花や燈たてゝ壁の影

夢と成し骸骨踊る萩の聲なり

夕立にひとり外見る女かな

服部嵐雪

我戀や口もすはれぬ青鬼燈ほづき

立ちいでてうしろ歩あゆみや礎のくれ

さみだれや蚯蚓の徹す鍋のそこ

蛇いちご半弓提て夫婦づれ

凧の吹きゆくうしろすがたかな

梅一輪一りんほどのあたたかさ

内藤丈艸

幾人かしぐれかけぬく勢田の橋

はるさめやぬけ出たままの夜著よきの穴

白雨ゆふだちにはしり下るや竹の蟻

稻妻のわれて落つるや山の上

つれのある所に掃くぞきりぎりす

鷹の目の枯野すわに居るあらしかな

悔クヤミいふ人のときれやきりぎりす

つり柿や障子にくるふ夕日陰

うづくまる薬いせの下の寒さ哉



霜原や窗の付きたる壁のきれ

陽炎や塚より外に住むばかり

淋しさの底ぬけて降るみぞれかな

ぬけがらにならびて死ぬる穢のせみ

狼の聲そろふなり雪の暮

斎部路通

肌のよき石にねむらん花の山

火桶抱てをとがホッい臍をかくしける

いねいねと人にいはれつ年の暮

ぼのくぼにかり厂落かゝる霜夜かな

小杉一笑

なまなまと雪残りけり藪の奥

よるの藤手燭に蜘蛛の哀なり

ゆふだち  
白雨や屋根の小艸の起あがり

とんぼう  
蜻蛉の薄に下る夕日かな

春雨や女の鏡かりて見る

辞世

心から雪うつくしや西の雲

加賀千代女

夕顔や女子の肌の見ゆる時

朝顔に釣瓶とられてもらひ水

落鮎や日に日に水のおそろしき

蝶々や何を夢見て羽づかひ

有井諸九

行春や海を見て居る鳥の子

紫陽花や雨にも日にも物ぐるひ

朧夜の底を行くなり雁の聲

炭太祇

ふらゝこの會釈こぼるゝや高みより

初戀や燈籠によする顔と顔

蚊屋くゞる女は髪に罪深し

身の穢やあつ爛好む胸赤し

逝く程に都の塔や穢の空

行く穢や抱けば身に添ふ膝頭

冬枯や雀のありく戸穢の中

うつくしき日和になりぬ雪のうへ

與謝蕪村

白露や茨の棘にひとつづつ

いかのぼり

凧 昨日の空の在り所

けふのみの春をあるひて仕舞けり

春雨や小磯の小貝ぬるるほど

牡丹散て打かさなりぬ二三弁

穉たつや何におどろく陰陽師

みのむしのぶらと世にふる時雨哉

更衣狂女の眉毛いはけなき

斧入て香におどろくや冬木立

山は暮れて野は黄昏の薄かな

ゆく春や重たき琵琶の抱きこころ

遅き日のつもりて遠きむかし哉

狐火や鬮體に雨のたまる夜に

ぼたん切て氣のおとろへしゆふべ哉

春雨やものがたり行く簑と傘

我也死して碑に邊ほとりせむ枯尾花

蕭条として石に日の入枯野かな

しら梅に明る夜ばかりとなりけり

\*



北壽老仙をいたむ

君あしたに去ぬゆふべのこゝろ千々に

何ぞはるかなる

君をおもふて岡のべに行つ遊ぶ

をかのべ何ぞかなしき

蒲公の黄に薺のしろう咲きたる

見る人ぞなき

雉子きびすのあるかひたなきに鳴を聞ば

友ありき河をへだてゝ住みにき

へげのけぶりのはと打ちうちれば西吹風の

はげしくて子笹原眞すげはら

のがるべきかたぞなき

友ありき河をへだてゝ住にきけふは

ほろゝともなかぬ

君あしたに去ぬゆふべのこゝろ千々に

何ぞはるかなる

我庵のあみだ佛ともし火もものせず

花もまいらせずすごすことゝめる今宵は

ことにたうとき

加藤曉臺

董つめばちひさき春のこゝろかな

蛇のきぬかけしすゝきのみだれ哉

見つゝゆけば茄子腐れて往昔道

むかし

曉や鯨の吼ゆるしもの海

鷹の目の水に居るや穉のくれ

吉分大魯

うつゝに蝶となりて此盃に身を投げむ

海は帆に埋れて春の夕べかな

われが身に故郷ふたつ蘊の暮

初時雨眞晝の道をぬらしけり

山風や霰ふき込む馬の耳

河内女や干菜に暗き窓の機

加舎白雄

人戀し燈ともしころをさくらちる

めくら子の端居さびしき木槿かな

蟲の音や月ははつかに書の小口

行穰の草にかくるゝ流れかな

木枯や市に業たづきの琴をきく

鶏の糞に氷こぼるゝ菜屑かな

木ばさみの白刃に蜂のいかりかな

榎本星布

散花ちるの下もとにめでたき髑髏かな

ゆく春や蓬が中に人の骨

蝶老いてたましひ菊にあそぶ哉

雉子羽は打つて琴の緒きれし夕哉

小林一茶

しづかさや湖水の底の雲のみね

じつとして雪をふらすや牧の駒

心からしなのゝ雪に降られけり

又ことし娑婆塞ぞよ艸の家

日ぐらしや急に明るき湖の方  
うみ

月花や四十九年のむだ歩き

花の月のとちんぷかんのうき世哉

龜風や壁のへمامシヨ入道

けふからは日本の厂ぞ楽に寝よ

青空に指で字を書く穠の暮

嗅で見てよしにする也猫の戀

笠でするさらばさらばや薄がすみ

蟻の道雲の峰よりつゞきけん

露の世は露の世ながらさりながら

ともかくもあなた任せの年の暮

ことしから丸儲けぞよ娑婆遊び

ぽつくりと死ぬが上手な佛哉



井上井月

春寒し雨にまじりて何か降

手元から日の暮れゆくや 凧

いかのぼり

夏深し或る夜の空の稻光

行穰の壁に挟みし柄なし鎌

落ち栗の座を定めるや窪溜り

何處やらに鶴の聲聞く霞かな